

●病院における皮膚科の位置づけは非常に厳しくなってきた。事務側は入院の数字でしか評価しないので入院患者の少ない皮膚科は不利である。外来は、数は多いが他科に受診した「ついで」受診が多く再診料さえ算定できず労が報われない。大学も人手不足で派遣医師のやりくりで苦勞している状況である。このままいくと病院から常勤の皮膚科医が消える日もそう遠くはないのかもしれない。病院勤務の会員の皆さん、どう立ち向かっていますか？ (川口博史)

●今回の編集で集まった文章を読んでいると、我々の世界ではまだ平和が続いているように思える。しかし、保険点数の改定のたびに小児科が優遇され、内科はそこそこ減点、皮膚科や整形外科等が大幅削減ということが明確になってきた。皮膚科が存続するためには、内科や小児科の資格取得を入院の条件とするなど、一大改革を行う必要があるように思う。(林 正幸)

●昨年の10号は原紀道先生追悼特集で特大号となりましたが、今号も玉稿を多数いただき、10号と変わらない厚さになりました。今後もできるだけ多くの先生に執筆していただきたく、申し訳ございませんが、1人当たりの原稿の枚数を制限する(最大で400字詰め10枚)ことに致しましたので、御了承をお願いします。それにしても、さすがは我が副会長、すごいです。昼は馬車馬のように働いて、夜は種馬のように働いて(?)いるんですね。(木花 光)

●1月の本誌編集委員会の日は、たまたま第130回芥川賞の選考日でした。受賞者は19歳と20歳の女性であり、丸山健二の「夏の流れ」や大江健三郎の「飼育」も今は昔となりました。今回の受賞作の1つは「蛇にピアス」でしたが、某選考委員曰く「体に穴をあけるのは好きじゃない」とのこと。なるほど、かつては「障子に穴をあけるのが得意な」受賞者もいましたっけ。(宮本秀明)

●自分の生活を振り返ってみると、最近ほとんど本を開く事がありません。通勤も数分ですし、出かけると言っても子供と一緒に、長距離の電車の中ではDVDをみちゃったりします。これではいかん! まずは新しい「神皮」をしっかりと読んで、パソコン漬けの頭に新鮮な空気を吹き込もう! そもそも、昔から広報とか文集の委員といえは「ゆっくり本を読むのが趣味の人」といったイメージ、ありませんか? 今年、私は高校卒業後四半世紀の文集を作る仕事があるのですが…できるかどうか、ちょっと心配です。(浅井俊弥)

●病気と付き合って三年半がたちました。病そのもののためなのか、化学療法のためなのか分からないのですが、最近さすがに疲れます。何とも形容できない疲労感で、20分も歩くともう遭難するのではないかと思います。動作もてきぱきといかず、今までより三倍時間がかかるように感じます。それでも仕事をしている時の方が元気だと言われ、幸せなあるいは因果な性分なのでしょね。編集委員の仕事は今回もオサボリしてしまいました。(塩谷千賀子)

## 神 皮 〈第11号〉

2004年 3月 7日発行

発 行 神奈川県皮膚科医会

発行人 菅原 信

〒247-0062 鎌倉市山ノ内635

電話 0467-47-8223

制 作 かまくら春秋社

表紙のことは●猫のピクニック

今日はピクニック。動くものにはワクワクしてしまいます。木があれば思わず登ってしまいます。爪も研いでおきましょうか。木の住人たちにはいい迷惑です。草むらは大好きです。胃の為に草を食べましょう。食べ過ぎると気持ち悪くなります。みんなとはぐれると危険が一杯。カラス相手は分が悪いようで……。ところで引率は……。もう眠くてたまらないようです。(中野祐美子)